

中高生を対象としたメディア・リテラシー育成のための
NIE 授業の開発と評価 - 「選択」活動を中心として -
Development and evaluation of a NIE lesson for promoting media
literacy in junior high school and high school
: Focus on “Selection” activity

学籍番号：201221603
氏名：八巻 龍
Ryo YAMAKI

日本においてメディア・リテラシー教育は、国語などの教科学習や、NIE (Newspaper in Education) の中で実践が報告されている。しかし、メディア・リテラシーは学校教育においてカリキュラム化されておらず授業時間の確保が難しい。そこで本研究では、メディア・リテラシーの基礎を学ぶことができ、学校教育との親和性が高い新聞を題材とした、1時間という短時間のNIE授業を開発し評価することを目的とした。また開発する授業において「(情報の) 選択」活動を中心とすることとした (Masterman, 1985)。

研究1では、授業開発のためにまず、NIEの実践報告と国語教育雑誌に報告されている実践から収集した中高生対象のメディア・リテラシー教育実践計65件についてレビューを行った。その結果、『「選択」活動の具体的な方法として、ニュース・バリュー (ニュースの重要性) について生徒に考えさせる』などを候補として絞り込んだ。そこで、新聞の第一面の疑似編集として、8つの出来事(「年金法改正」など)から掲載する出来事を「選択」する活動を中心とした授業を開発した。その後、関東の中学校の3年生3クラス114名に開発した授業の予備実践を「技術」の時間で実施した。実践後の生徒の感想では「作業の難しさ」が挙げられており、その理由としては、ニュース・バリューについての説明を作業後に実施したことにより、生徒の「選択」する基準が明確ではなく、作業に難しさを感じたことが考えられる。そのため、授業の改善点として、「選択」の基準が明確になるように、ニュース・バリューについて作業前に説明する授業展開が考えられる。

研究2では、関東地方の中高一貫校のB校の中学1年生4クラス157名と高校1年生4クラス151名、高等学校A校の1年生6クラス246名の計14クラス554名を対象として「情報」(高校)「技術」(中学)の時間を使って本実践を行い、開発した授業の評価、およびNV事前教示群とNV事後教示群の条件間の「制作者の意図性への気づき」などの違いについて検討した。評価については、新聞において「送り手が情報を構成する理由」の項目(自由記述)と、「新聞についての基礎知識」(穴埋め式)の項目を授業後に生徒に尋ねた結果より行うこととした。分析では、全体の分析の後に、B校の中高生の「学年間による検討」と、A校、B校の「高校間による検討」を行い、主に以下のような結果が見られた。

- 1) 新聞についての知識問題に関しては、中高全体で授業前よりも理解の伸びが見られ、特に、ニュース・バリューについて後に教示をした条件が理解の伸びが高かった
- 2) 「送り手が情報を構成する理由」の回答について、「学年間による検討」の結果、B校の中高生で、ニュース・バリューについて後に教示をしたほうが、他メディアと比べた「新聞」というメディアの特性に関する理解が多く見られた
- 3) 「学校間による検討」の結果、A校の高校生において、また「学年間による検討」の結果、B校の中学生において、「送り手が情報を構成する理由」の回答について、ニュース・バリューについて先に教示をしたほうが、新聞では重要な記事から優先・強調して扱っていくことに関する理解が多く見られた

今後は、中高一貫校ではない一般の公立中学での実施と評価や、開発した授業と他のメディア・リテラシー育成授業(読み解きを中心とした授業など)との組み合わせによる効果の検討などが行っていくことが望まれる。

研究指導教員：鈴木 佳苗
副研究指導教員：平久江 祐司